第２回生駒市総合計画審議会　第三部会

開催日時　平成３０年８月１日（水）１３時３０分～１６時００分

開催場所　生駒市役所４階　４０３・４０４会議室

出席者

（ 委 員 ）高取委員、谷中委員、藤尾委員、村上委員

（事 務 局）坂谷秘書企画課長、岡村秘書企画課課長補佐、日高秘書企画課主幹、
片山秘書企画課員

欠席者　　なし

１　開会

２　案件

（１）各小分野の検証（№241・242・243・411・421・431・441・442・451）

（２）その他

３　閉会

以下、発言要旨

１　開会

【 事 務 局 】　ただいまから、第２回総合計画審議会第三部会を開催します。

【 事 務 局 】　（資料確認）

２　案件

（１）各小分野の検証

Ｎｏ．２４１　文化活動

【高取部会長】　行政進捗度、審議会ともにＢである。

【谷 中 委 員】　市民実感度はよくないが、「どちらとも言えない」を勘定に入れないなら、それほど悪くないとも言える。

【藤 尾 委 員】　年１回でも子どもの頃から本物を聴く経験をさせてあげたい。住民の演奏を楽しむことも大事だが、多少お金をかけても子どもが本物を体験する場も大事である。

【高取部会長】　指標の「市民の成果発表事業の参加者数」「生涯学習施設で行う文化芸術事業の満足度」「生涯学習施設の利用者数」は、若干目標に達していないものもあるが、概ね達成されているため、Ｂでよいか。

【各委員】　（異議なし）

Ｎｏ．２４２　歴史・伝統文化

【高取部会長】　行政進捗度がＣ、審議会はＢが１人、Ｃが３人である。

【藤尾委員】　歴史・伝統文化は私たちの世代が境目となる。今は私たちが元気で知恵や経験をまとめて活用していく最終時期であり、そのうち、「いつでも聞ける」とはいかなくなる。演奏会などの文化活動やスポーツは毎年できるが、歴史や伝統文化は消えていく。今しかないと危機感をもっている。

【谷中委員】　今はそのようなものを「読みたい、話を聞きたい」と思うが、最近まで関心がなかった。そのようなことの大切さに重きを置く人は少ないと思う。また、「生駒ふるさとミュージアム」は昔の様々なものが展示されているが、入場料が高い。

【事務局】　常設は無料だが、特別展が有料である。小学校などの教育で使っており、入館者数も増えている。

【高取部会長】　学校行事以外に自ら興味をもって行く人がどのくらいかが重要である。学校行事以外の来館者がリタイア後の人ばかりで、若い世代が少ないと残念である。全体会でも、今後生駒は大阪のベッドタウンとしてだけでなく、ライフスタイルの変化に応じるまちになることが言われているが、その活性化に大事なのは地域愛、地元愛、郷土愛のため、生駒の歴史・伝統文化に興味をもってもらうことは大事である。「生駒ふるさとミュージアムの来館者総数（累計）」は増えており、歴史や文化系の講座、体験学習もあるためアピールして、私たちの世代に届くようにしてすればよいと思う。

【藤尾委員】　以前消防署の横の建物で、田んぼで使う農機具や米の埃を飛ばす選別機などのくらしのものを展示していたが、あれはよかった。

【高取部会長】　私は謙遜しているイメージがありＢにしたが、Ｃの意見が多いのでＣ

でよいか。

【 各 委 員 】　（異議なし）

Ｎｏ．２４３　**スポーツ・レクリエーション**

【高取部会長】　行政進捗度がＢ、審議会も全員Ｂである。

【藤尾委員】　私は生駒市スポーツ推進委員を担っているが、スポーツ推進委員も高齢化でほとんど７０代である。活性化したいと思い、各地域の防災訓練で、隅に軽スポーツの器具を置いて子どもたちの遊びとセットにすることをスポーツ振興課に提案して行ってきたところ、どんどん防災訓練＆軽スポーツのつどいのようになってきている。合体すれば大きなイベントにできるのに、縦割りになっているものが多々ある。

【高取部会長】　縦割りはよく言われることである。スポーツ振興課、健康課、高齢施策課などがコラボすべきことは分かっていても、できない壁があるのだと思う。また、指標の「市が主催する市民体育祭、市民体育大会、スポーツ教室などの参加者数」が気になった。「総合型地域スポーツクラブや各体育施設の指定管理者の自主事業で様々なスポーツイベント等が開催された結果、市民にとっての選択肢が増えたことにより、市主催のスポーツイベント等の参加者が減少したものと思われる」とあるが、県からも成果があまり上がっていないと聞く。平成２６年を境に一気に落ちており、これだけ右肩下がりになっている理由が選択肢が増えたためという考察は疑問である。

【 事 務 局 】　市内のいくつかの総合型地域スポーツクラブに自主事業で活動をやってもらっており、そちらにかなりシフトしているため、第６次総合計画の指標は、総合型地域スポーツクラブの会員数にしたほうがよいと思う。

【藤尾委員】　状況が変わってきているので、そのほうがよい。

【高取部会長】　指標として相応しくなくなってきているのでそのほうがよい。指標は宿題とする。進捗度は意見が割れていないためＢでよいと思う。

【 各 委 員 】　（異議なし）

Ｎｏ．４１１　**地域福祉活動**

【高取部会長】　ボランティア養成講座の開催が多く行われているが、上手く活用されていないのがもったいないという意見が出ている。

【藤尾委員】　ボランティア養成講座はよく開催され、私も講師を何度か務めたが、受講者は７０代後半の高齢者が多い。５～６人の受講者のために、市職員が２～３人受付に座り、資料をたくさん配布して１時間半講義を行っても、受講者は「ボランティア養成講座の募集を見て来たが、他でもボランティアをしているので活動できない」と言う。高齢者のイベントでは参加者のほうが元気でてきぱきしており、ボランティアの人は「私が座る場所はどこか」、「お茶はどこか」と言っている。ボランティア養成講座の受講者数は何百人とカウントされているが、やりっぱなしで受講者を現場で活用できていない。受講した人には、その人に合った何らかの活動をしてもらいたい。

【高取部会長】　介護予防系のボランティア養成に長く携わっているが、大学では、最初にアドミッション・ポリシーとして求める人材を明確に伝え「これに合わない人は来ないでほしい」とフィルターをかけることが大事と言っている。興味本位の人を１００人名簿登録するより、活動できる人を１０人養成するほうが何倍も効果がある。事前説明会に参加してもらい、地域に出ることを納得したうえで養成講座を受講する２段階にしているため、「活動できない」と言う人はほとんどいない。この方法で着実に登録者数を増やしている。数を求めると名簿上の幽霊部員が増える。

【藤尾委員】　活動できない１０人より、やる気のある１人が必要である。市が主催する講座は「行ってみたい」「修了証がほしい」と受講するケースもある。自分にプラスになるもの、得になること、緩いところにはどこでも行く。普段介護で忙しいと言っている人が親を預けてでも講座に来るが、ボランティアとなると「親の介護で忙しいためできない」と言う。

【谷中委員】　養成講座の修了証書をもらって、何かよいことはあるのか。

【藤尾委員】　あまりないと思う。市長名が記載された修了証書がほしいのだと思う。その人の大きな生きがいになっているので悪いとは言わないが、生きがいのために市が何十万円も使ってすることはない。

【高取部会長】　認定書や修了証書目当ての人は多い。

【谷中委員】　「ボランティアは人としてレベルが高い」と流行りのようになっている。修了証書を渡すから今の状況があるなら、修了証書はなくてもよい。

【藤尾委員】　昔は名誉職だった民生委員が、食事の支度を中断して支援に走るボランティアのようになっている中、市は逆行している。「自分は何ができるか、どのように輝けるか」を考えるよう、アピールが必要である。

【高取部会長】　高齢施策でのボランティア育成の考え方はかなり変わってきたと聞いている。養成講座では講座をするより、現場を見せるほうが早い。先生の講座を何回か組み込むと講座を作りやすいが、それでは安易である。

【谷中委員】　最近市役所主催の講座で参加者が少ない場合「来てほしい」と言われることがあるが、市役所に、ボランティアを養成したいという気持ちとは違うものも交じっているのではと思う。安直に講座をしすぎている。

【高取部会長】　リーダーやボランティア養成に肩書は必要ないと常々思っている。進捗度は意見が割れていないのでＢでよいか。

【各委員】　（異議なし）

Ｎｏ．４２１　健康づくり

【高取部会長】　Ｂが３人、Ｃが１人である。「特定健康診査の受診率」と「がん検診の受診率」は微増だが目標値未達が続き、４年後も変わらないことが目に見えているため、「４年後のまちが概ね実現されている」とは言えないと思う。

【谷中委員】　「がん検診の受診率」が高ければ健康な人が増えるのか。

【藤尾委員】　意識が高くなる。生駒市は２～３年前に受診率が上がったことで県の健康のつどいで表彰された。しかし、早期発見したことで急にテンションが下がる人もあり、早期発見が不幸と思うことがある。

【谷中委員】　そう思うと、受けなくてもよいのかなと思ってしまう。

【高取部会長】　メタボ健診は、公衆衛生の専門家が「莫大な費用の割に病気減少の効果がない」と疑問視していることから批判も出ている。しかし、胃がんは初期の自覚症状がなく、調子が悪くなって病院に行くと手遅れだった例や自覚症状がない状態で発見されて完治した例があるため、がん検診の受診率は上がったほうがよいと思う。

【藤尾委員】　毎年の健診は住民の務めとして受けるべきである。生駒市は大阪や奈良、京都に近いため、仕事関係などで他市で健診を受ける人が多い。それもカウントすればかなりの受診率になる。それ以外の自分の意思で受ける受診率は低くなるのは当然だと思う。

【谷中委員】　他市で健診を受ける人の数はカウントしにくい。

【高取部会長】　委員からはＢの意見が多い。評価はＢでよいか。

【各委員】　（異議なし）

Ｎｏ．４３１　医療

【高取部会長】　行政進捗度Ｃに対し、Ｂ、Ｃ、Ｄと意見が分かれている。

【高取部会長】　生駒市立病院で子どもの救急搬送ができず、他市に依存しなければならないことは問題だと思う。指標「小児科患者の市内救急搬送率」の平成３０年度の目標６０％に対して、平成２９年は約３０％である。７０％は市外で診てもらわなければならず、急を要する場合に間に合わないとなると深刻な問題である。目標値からかけ離れているうえに、ここ１～２年は数値が下がっており逆行している。

【藤尾委員】　セラビーいこまの夜間救急はどのくらいの人数を受け付けられるか。以前、孫が熱を出したときに連絡したら、遠方まで連れて行かなければいけなかった。

【事務局】　休日夜間応急診療は、「行政の４年間の主な取組」の「①２」に記載があるように、内科３，４６３件、小児科４，４１８件である。

【藤尾委員】　子どもの熱は昼間より夜間によく出るのでありがたい。近場で受け入れてくれるところがあればよい。

【高取部会長】　生駒市立病院は、生駒市の看板病院になれるよう医師不足についても、解消に努められたい。

【藤尾委員】　生駒市は市内に病院が多く恵まれている。吉野町ではヘリコプターで病院に行かなければならないところに住んでいる人もいる。

【高取部会長】　生駒市は救急救命が弱く、入れる病院が少ない。奈良県自体が弱い。

【藤尾委員】　今は、消防が近隣の地域と連携するシステムができていると聞いている。

【 事 務 局 】　消防は生駒市と奈良市は単独だが、通信指令は奈良市と共同である。それ以外の自治体は広域で連携している

【高取部会長】　市民感覚で言うと、安心感はあまりなく、いざというときに頼れる気がしない。進捗度の判断基準は４年後のまちが「ある程度実現されている」ととらえられるか、「実現されていない」ととらえられるかだが、どうか。

【谷中委員】　設備内容は実現されている。

【高取部会長】　間を取ってＣにするのはどうか。Ｄに近いＣだと思うが。

【 各 委 員 】　（異議なし）

Ｎｏ．４４１　高齢者保健福祉

【高取部会長】　行政進捗度もＢ、審議会も全員Ｂである。

【谷中委員】　「どちらとも言えない」をどうとるかにより、判断が難しかった。それほどよいと実感されているとは言えない印象である。

【藤尾委員】　私は、親は家で見るのが当たり前だった世代なので、「行政がここまで高齢者に至れり尽くせりにしなければならないのか」と思うことがある。私たちが世話になるときは、行政や地域包括支援センターなど人任せにする時代は崩壊し、今ほどきめ細かな福祉はできないと思う。高齢者がさらに増えると行政や地域包括支援センターではまかなえない。運動して元気になる高齢者を育てるレベルではなくなる。その予防策として、地域力や住民力が成果を出せるよう、今から本気で人材育成などの準備が必要である。火がついてから養成しても遅い。生駒市の「ひまわりの集い」のようなことが、全国でできない理由は、大きなイベントができる人を育ててこなかったからである。生駒市は、３０年前から人を育てグループを守ってきた。住民１人では力不足でも、５人や１０人の仲間になればできるということを根底にもって忘れないでほしい。今は１人の高齢者に５～６人がサポートしているが、５年後、１０年後に向けて今から準備してほしい。

【谷中委員】　生駒市が目指していることを考えると、若者や子どもに重点が移ると思うが、それで高齢者が軽んじられるかと言うと、そうでもないと思う。

しかし、この記載だけで高齢者が安心して暮らせる社会の実現は難しい。総合的に考えて全体的に改善しなければ、高齢者に関しても回らない。

【藤尾委員】　行政の進め方として子どものほうが主体になると、高齢者のお金は削られるため、民生委員を含めて皆がサポートすることが必要になる。

【谷中委員】　隣近所で少しずつ助け合う環境ができてほしいが、簡単ではない。

【藤尾委員】　急にはできない。

【高取部会長】　進行管理検証シートの指標はすべて合格点で、生駒市は高齢者施策に関して全国から視察に来るようなトップレベルと言われている割に、市民実感度が低いため、谷中委員が言われる市民実感度は案外無視できない。「健康づくり」に比べてもずっと低い。国が行なうテストは１００点かもしれないが、市民には、全国に視察が来るモデル的な市という実感がないことを深刻にとらえたほうがよい。「健康づくり」の市民実感度の、「健診や地域の活動により、生活習慣病の予防、改善が進み、元気で生きがいを持った市民が増えている」では、「どちらかというとそう思う」が３割以上ある。「どちらとも言えない」が大半を占めるアンケートで、「どちらかというとそう思う」が多いのは大きい。しかし、「高齢者保健福祉」の市民実感度の、「早い時期から健康づくり、生きがいづくり、介護予防に積極的に取り組んでいる」は、「十分取り組んでいる」と「取り組んでいる」を合わせても２０％にもいかない。総じて「どちらかというとそう思う」は２０％くらいしかなく、モデル的な市にしては低い。５年後のことも含めて、成績表では分からない危機感を市民は肌で感じているのかもしれない。成績はよいが安心できない。

【藤尾委員】　認知症サポーター養成講座を受講しただけで認知症サポーターに認定するのはよくない。生駒市には何百人も何千人も認知症サポーターがいるが、２～３時間講義を聞いて資料を読んだだけでは、知らない人の家に入って認知症の人をサポートすることはできない。

【谷中委員】　認知症サポーターは認知症が疑われる人が１人で歩いているときに声掛けをするくらいのボランティアで、大層なことはしない。

【藤尾委員】　認知症サポーターと言うと権限をもっているように聞こえる。間違って声を掛けられた人は気分が悪いため、声を掛けるのも難しい。受講す

るだけで健康づくり推進員になれる健康づくり推進員の養成講座と同じである。意識や知識をもつのはよいことだが、実践が伴っていない。

【高取部会長】　指標にあるため何人養成したかが成績になる。年間３００人という数を見れば満点だが、街中でオレンジリングを付けている人を見かけることはない。先日うちの大学でも近畿厚生局の人が理学療法学科の学生を対象に講義を行い、８０人以上が受講したが、その後オレンジリングを付けている学生はいないのが現状である。

【藤尾委員】　オレンジリングは権限がなく自己満足になっている。地元の自治会でも認知症サポーター養成講座をするので人を集めてほしいと言われてやったことがある。

【谷中委員】　普通の考え方ができる人なら、認知症サポーター養成講座を受けなくても、当たり前のようにできることである。

【藤尾委員】　あまりにも数を上乗せしたいという意図が見え見えである。認知症サポーター養成講座をしたからと言って安心してはいけない。

【高取部会長】　養成講座は悪いことではない。ターゲットによっても違うと思う。

【藤尾委員】　行政の努力は認めるが、受講者をどのように活用するかが大切である。

【高取部会長】　スーパーのレジやコンビニの店員はオレンジリングを必須にしてもよい。レジで高齢者の対応がまともにできない若者こそ受講してオレンジリングを付けて仕事をすべきである。「高齢者保健福祉」はＢとする。

【各委員】　（異議なし）

Ｎｏ．４４２　社会保障

【高取部会長】　行政進捗度もＢ、審議会も全員Ｂである。

【谷中委員】　Ｂほどの印象はないが、市民実感度から判断するとＢだと思う。

【藤尾委員】　国の事業なので生駒市だけ上げたり、下げたりすることはできない。今日ニュースで、医療費が安くならなくなるというのを見た。

【事務局】　収入により自己負担が上がるという内容である。この項目は特殊なので、次の基本計画でも国民健康保険は医療に入れるなど分野を整理する。政府でも、指標の「就労支援達成率」は元々分母が少ないので、かなり数値が上下している。

【高取部会長】　自治体で差がある指標は「４年後のまち」の「生活保護制度が適正に運用され、生活に困窮している方の自立支援、就労支援が行われている」だが、これには温度差やハードルの高さなど様々な問題がある。指標は上回っているため、評価を下げる必要はないと思う。「社会保障」はＢとする。

【各委員】　（異議なし）

Ｎｏ．４５１　障がい者保健福祉

【高取部会長】　行政進捗度もＢ、審議会も全員Ｂである。

【谷中委員】　これも、市民実感度で「どちらとも言えない」が多いため、よいと思っていない人が、「どちらとも言えない」と評価したのではと思う。「どちらとも言えない」を考えないなら、満足度はそこそこある。

【高取部会長】　「どちらとも言えない」の大半は、障がい者保健福祉について知らない人だと思うため、「どちらとも言えない」は除いて評価したほうがよい。「どちらかというとそう思う」のほうが多いため、知っている人の中では、よい評価をしている人が多いと思う。「４年後のまち」の、「障がい者が住み慣れた地域の中で、自立して生活している」や「障がいのある人とない人が、互いに理解し、尊重し合う考えが広がっている」は、福祉の専門職でなければ答えにくい。

【藤尾委員】　障がい者福祉に対する住民意識も変わってきている。私は、障がい者をサポートするボランティア養成講座を、約２０年前に１年間受けた。指導員から「現場はあなたたちが来るのを手を広げて待っている」と聞き、意気込んで行ったが、現場は大違いで私たちのようなものが来ることを迷惑がっていた。しかし、２～３年交流するうちに大きく変わった。今はパン屋もやっている。私が風を入れたことが結果的によかった。これは、私の人生の中でも大きな活動だったと誇りに思っている。最初は、指導員や医師から「来ないでくれ」と泣いて止められたが、私たちが関わることで、生駒セイセイビルで年１回行う大きなジャズコンサートで見事に大きな声で歌うようになった。このようなことをすることが、総合計画で言う「住民の役割」だと思う。高齢でも子どもでも障がいでも、

専門職ではなく、住民の役割が大きなポイントになってきている。今後担っていくのは住民である。「高齢者だから、若いからできない」ではなく、「９０歳の住民は何ができるか」、「５０歳の住民は何ができるか」ということを、総合計画の中で、見出していかなければならないと思う。今までは安泰でこれたが、５年先の総合計画は今までのようにはいかない。このことは数字も表しており、世の中のすべて、また、この会議でも感じている。障がい福祉も、住民がどこまで関われるかが重要である。「住民力は見えないが、大きな力を発揮する」ということを、ここで強調させていただきたい。

【高取部会長】　以前は障がい者の作業所は人形や飾りのようなものを作ることが多かったが、最近はカフェやパン屋が多い。それを認知症カフェにしようというところもあり、時代が変わってきている。しかし、身体はよいが、精神の理解はまだまだと思うところがある。いまだに何かの罪を犯した際には、必ず精神科の受診歴が出てくる。犯罪とはまったく関係ないのに、ちょっとしたうつ病で１回でも診療内科を受診したことがあれば「精神科受診歴あり」と言われ、危険視される。マスコミの報道も悪い。進捗度を変えるようなものはないため、「障がい者保健福祉」はＢでよいか。

【 各 委 員 】　（異議なし）

【 事 務 局 】　（事務連絡）

【高取部会長】　これをもって、第２回総合計画審議会　第三部会を終了します。

―― 了 ――